フォト・アルバム— この1年



スタディーツアー「中東夏季研修」
（2011.9.1〜15）



入学式（2011.4.2）



千葉県大学野球連盟３部リーグ優勝＆
２部昇格（2011.9.10）



留学生歓迎懇親会（2011.6.24）



「全米模擬国連大会」に挑戦
（2011.10.21〜23）



在学生による中学校学習支援ボランティア（2011.8.1〜25）



留学生フェア（2011.10.23）



高校生対抗企業経営チャレンジ21
（2011.8.22〜23）



第1回「説漢語　通中国」中国語コンテスト大学生・団体の部1位、2位を独占（2011.12.4）



麗陵祭に駐日ラオス特命全権大使が来園（2011.11.3）



セント・マーチンズ大学学長来学「学生交流に関する協定」調印式（2011.12.14）



留学生が高校生と交流（2011.11.10）



卒業直前特別講義（2012.2.1）



香港理工大学とテレビ会議「Teleconference」（2011.11.22 ）



第2回「麗澤旗親善剣道大会」（2012.2.26）



国際交流もちつき大会（2011.12.2）

〈トピックス〉

ISO26000導入の目的と効果

経済学部准教授　首藤聡一朗



現在、麗澤大学は『社会的責任に関する手引き』（以下、ISO26000）に従った取り組みを展開しています。

ISO26000とは？

ISO26000とは、「社会の持続可能な発展」を図るために、企業その他組織による社会的責任の実践を促すことを目的とした国際規格です。

国際規格というと、品質マネジメントシステムに関わるISO9000のように、定められたプロセスを遵守していることを第三者機関に認証してもらうというイメージがあるかもしれません。しかし、ISO26000はそれらの規格とは性質が異なります。

ISO26000は認証規格ではなく、手引き（ガイドライン）です。定められたプロセスを遵守することではなく、手引きを活用してパフォーマンスを改善することが求められます。

そのため、第三者がプロセスを遵守しているかを認証するということもありません。ISO導入プロセスを評価するのは客観的立場にある第三者ではなく、実はその企業や組織に利害関係を持つステークホルダーなのです。

ISO26000の最大の特徴は、「ステークホルダー・エンゲージメント」（ステークホルダー関与）

の重視にあるといわれています。ステークホルダーの関与は、評価の場面だけではなく、取り組むべき課題の明確化など広範囲に及びます。本学でも、在学生をはじめとする幅広いステークホルダーにご協力いただき、貴重な示唆を頂戴しております。

導入の経緯と目的

ＩＳＯ２６０００の導入は、本学が目指す「麗澤教育」とも関係が深いといえます。「社会の持続可能な発展」は今後ますます世界的に重要な課題となっていきますが、そのような発展に貢献できる人材は、まさに麗澤教育が目指す人間像とも重なるためです。「麗澤教育の実践を通じて、社会の持続的な発展に対する社会的責任を果たす」と表現することもできるでしょう。

麗澤大学へのＩＳＯ２６０００導入に主導的役割を果たした髙巖経済学部長は雑誌の取材に応えて、次のように述べています。

学部長になるにあたって、経済学部の教育に関しては、明確な形で「建学の理念」を反映させていこうと考えていました。そこで改めて「建学の理念」を読み返したところ、その哲学がまさに「持続可能な社会の構築」にあるということを再認識した次第です。

こうして、ＩＳＯ２６０００を活用するというアイデアがごく自然と浮かんできました。[1]

そのため、本学では二〇〇八年十一月からの試験的な導入期間を経て、二〇一〇年九月に、中山理学長のリーダーシップのもと、大学として公式にＩＳＯ２６０００の積極的な活用を宣言いたしました。

ＩＳＯ２６０００活用の目的は、グローバルな基準でこれまで麗澤大学が行ってきた「社会の持続可能な発展」に貢献する諸活動を見直し、整理して、さらに活性化させていくことにあります。

なお、本学は世界初のＩＳＯ２６０００導入事例であるため、高い注目を集めており、すでに複数の雑誌で本学のＩＳＯ２６０００導入について特集が組まれています。

具体的な取り組み

「社会の持続可能な発展」を図るための社会的責任の実践を本学の立場で考えた場合、取り組むべき課題は多岐にわたりますが、本学の現在の状況、課題への取り組みが定着した場合の効果などを考慮し、まずは図表１に表されている五つの課題に優先的に取り組んでいます。

具体的取り組みについては、麗澤大学ホームページ（http://www.reitaku-u.ac.jp/daigaku/torikumi/iso26000/）にも記載されておりますので、そちらをご参照いただければ幸いです。

ＩＳＯ２６０００導入の効果

公式なＩＳＯ２６０００の積極活用宣言から一年が過ぎ、その効果が少しずつ表れてきています。ここで強調しておきたいのは、その効果はＩＳＯ２６０００

図表１　麗澤大学における具体的取り組み



に定められた手順に従って大学運営を行ったから生じたというわけではないという点です。そもそもＩＳＯ２６０００は、あくまで汎用的な手引き（ガイドライン）です。その汎用的な手引きを参照しながら、麗澤大学および麗澤大学が直面している環境で機能する独自の枠組みを作り出していくためには大きな努力が必要とされました。また、その枠組みを作っただけで効果が生じるわけもなく、その枠組みを麗澤大学が活用して初めて効果が生じるというものなのです。

そもそもＩＳＯ２６０００を推進する活動自体が直接的効果を生むということは考えられません。それ自体が付加価値を生む活動ではないのです。むしろ、麗澤大学が行ってきた、そして新たに行おうとする活動を促進する形で間接的に効果を生むものだと考えています。

そのような間接的な効果の一つはアナウンスメントの効果です。アナウンスメントの効果にも様々なものがありますが、麗澤大学がこれまで行ってきた「持続可能な社会の発展」に貢献する多様な活動をわかりやすい形で外部の方々にお伝えすることが出来るということがまずあります。陰徳を積むことは重要ですが、世に広く知らしめることも大切だと考えます。同じような志を持った方々との交流のきっかけになることもありますし、フォロワーがでてくることもあるためです。志を同じくする方々が仲間に加わってくれるかもしれません。

また、アナウンスメントの効果は外部に限ったものだけではありません。それまで地道に活動を続けられてきた方、新しく活動しようとされている方にスポットライトが当たることで、麗澤大学の内部でも協力が得やすくなることがあります。

次に、組織活性化という効果もございます。中山理学長はＩＳＯ２６０００活用の効果について次のように述べています。

> 大学の授業が非常に活性化したと思います。本学のＳＲ推進グループ長である髙教授が中心となって段階履修的な（初級・中級・上級にグレード分けされている）ビジネスゲーム教材を完成させ、授業に取り入れていますが、授業評価アンケートによると非常に評価点が高いですね。[ii]

このビジネスゲーム教材は、ＩＳＯ２６０００の柱である「ステークホルダー重視」を具体化するための施策の一つとして開発されました。このようにＩＳＯ２６０００活用をきっかけに新たな試みが行われることがあります。ＩＳＯ２６０００を機に行われた新たな試みとしては、学生によるフリーペーパーの発行支援や模擬国連への参加支援などもあります。

このような新たな試みが生じるのは、ＩＳＯ２６０００を活用することで「資産の棚卸・見える化」が促進されるためです。

中山理学長は、「ＩＳＯ２６０００活用で、もう一つ大きな効果が出ていると思うのは、自分たちの恵まれた財産に気づくようになったことです」[iii]とも述べています。上記の発言に続いて述べられているのは自然環境についてですが、資産は自然環境や物理的なものに限られるわけではありません。「持続可能な社会の発展」に貢献しようとし、実際に様々な活動を続けられている方々、あるいはそれらの方々および新たな試みに取り組まれようとする方々の背後にある麗澤大学の組織文化なども重要な資産です。ＩＳＯ２６０００の枠組みで麗澤大学の活動を捉え直すことで、それらの貴重な資産の棚卸および見える化を促進することができるようになってきています。

資産の棚卸および見える化が促進されるのは、ＩＳＯ２６０００がステークホルダーとの対話を重要視しているからでもあります。麗澤大学でも、在学生をはじめとする様々なステークホルダーとの対話を進めています。その中で、様々な情報や要望が意思決定を行える層にまで届き、新たな試みに資源配分することにつながっています。例えば、前述の学生によるフリーペーパーの発行支援や模擬国連への参加支援は学生との対話がきっかけとなって進められたものです。また、自然環境の保護についても貴重なご意見とアイデアを頂戴しております。

以上のような効果が見えつつありますが、まだ取り組みは始まったばかりです。今後さらにＩＳＯ２６０００活用を通じて「持続可能な社会の発展」に貢献していきたいと考えています。

注

i 『月刊アイソス』二〇一一年八月号、一七ページ。
ii 『月刊アイソス』二〇一一年八月号、一一ページ。
iii 『月刊アイソス』二〇一一年八月号、一二ページ。

参考文献
『月刊アイソス』二〇一一年八月号、№一六五、システム規格社。



〈トピックス〉

あすなろ～明日は○○になろう！

ホームカミングデイ委員会事務局
総合政策室　鈴木麻衣子



東日本大震災を受けて

第八回となる二〇一一年のホームカミングデイでは、学位記授与式の直前に発生した東日本大震災のために、式に参加することができなかった七十期生の門出を改めてお祝いしたいというおもいから、「第二の卒業式」を企画しました。

震災直後は、学位記授与式の開催自体が危ぶまれましたが、七割の卒業生を迎え挙行することができました。しかし、残る三割の卒業生は参加できなかったわけです。このとき、教職員ほぼ全員が、「ケジメ（区切り）」をつけられなかった学生の気持ちを考え、ホームカミングデイで卒業式を、と考えました。

テーマとプレイベント

今年はテーマを『あすなろ～明日は○○になろう！』と掲げました。このテーマには、明日（将来）の自分に託する思い、気持ちや夢と期待が込められ、また新校舎「あすなろ」にちなんでいます。

このテーマをもじり、学生、卒業生、来学者、教職員の「○○（夢、希望、将来への期待など）」を書いて貼ってもらうプレイベントを行いました。「○○」を書いてもらう用紙は、葉っぱや花の形をしています。貼り付ける台紙は、新校舎あすなろと校舎を囲む木々をイメージし、みんなの「○○」で、校舎や校舎を囲む木が花や葉で生い茂るようになります。貼られ

た「明日は○○になろう」メッセージは、ホームカミングデイ後にも増え続け、その数は二五〇枚を超えました。内容は、自分の成長を願うものや、身近な人たちを思いやるものが多数見受けられました。この震災を経験したためか、家族、仲間との絆を意識した「○○」が多かったのも印象的でした。

いよいよ当日

いよいよ十月一日。約四八〇名の卒業生、在学生、教職員がキャンパスに集いました。今年は、新校舎あすなろのお披露目も大きな目的の一つとしていましたが、初めて訪れた卒業生からは感動の声、また受付となった校舎かえでの新装学生ラウンジでは「学生が集まりやすくなり大学らしくなった！」との声もありました。

第二の卒業式では、井出元ホームカミングデイ委員長、中山理学長、廣池幹堂理事長からの歓迎メッセージ、七十期生代表の挨拶と招待期を代表して六十期生の方から挨拶をいただきました。時折笑いが起こるなど、とても温かい雰囲気に包まれました。また、七十期生には、心にずしりと届く勇気が出る言葉やメッセージを一冊にまとめた『それでもいまは、真っ白な帆を上げよう』（旺文社）が贈られました。この本には中山学長の学位記授与式での告辞が、巻頭に掲載されています。私もこの本を読みましたが、震災当時と学位記授与式に実際に学長の告辞を耳にした時の感動がよみがえり、誰かに話したくなる、心に響くメッセージ集です。

第二の卒業式の後は、全員で記念撮影、そしてパーティへと移り、すがすがしい秋空の下で参加者はそれぞれに昔話に盛り上がり、在学生や卒業生によるパフォーマンスを楽しみました。


「第二の卒業式」の学位記授与式



パーティ終了後は、各教室に分かれ、様々な催しが行われました。「活躍する麗大生」の部屋では、〝全米模擬国連大会〟に日本の大学チームとして初めて参加する学生グループの発表が行われました。「ビジネスゲーム」の部屋では、在学生が受けている最先端の実践的教育プログラムを二時間にわたって体験しました。また、各グループ単位に設けられた語らいの部屋では、さまざまなグループが集まり、昔を懐かしみ、近況を報告し合っていました。卒業生組織である麗大麗澤会が担当した「おもてなしの部屋」では、歴代卒業生の卒業アルバムの閲覧コーナーや卒業生の活躍を紹介する展示が行われました。

また「キッズルーム」も大盛況でした。利用してくれる子どもの年齢層も広くなり、時には、大学校舎に響く泣き声とそれをあやすスタッフの声、とても新鮮でした。今年の反省も来年に活かし、毎年少しずつではありますが、利用していただきやすい環境を整え、

ノウハウを蓄積していきたいと思います。まさに校歌に謳われている「日々に孜孜（ししん）」「日に新たなり」の心境で取り組んでいます。

ホームカミングデイを終えて思うこと、来年への思い

今年のホームカミングデイを通して感じたことがあります。一つは、とある卒業生に「ぼくのこと覚えていますか?」と声をかけられました。「もちろん！覚えていますとも」です。よくよく考えて、この言葉にハッとさせられました。私たち職員の記憶から、自分たちの記憶が無くなっていると思っているようなのです。この話を職場ですると、そのような体験をした職員がいたのです。驚きました。卒業生の皆さん、皆さんにかかわらせていただいた職員は皆さんをちゃんと覚えていますので、安心して帰って来てください。

二つ目は、自分の仕事の仕方についてです。今まで後輩ができたことがなかったので、どんな仕事でも自分で何とかこなしてきました。ですので、「仕事をみんなで分ける、頼む」ということが苦手であることがわかったのです。仕事を分ける、任せるということは、任せる相手を信用・信頼しなければなりません。こうして、チームで取り組むことで得る信頼関係を築く大切さに、自己の成長があるのだな、と実感したことです。

三つ目は、ホームカミングデイの持つ意味・役割を再認識しました。各所から「毎年開催しなくてもいいのでは?」という声もあがりますし、実際自分自身もそう思うこともありました。しかし、今年は行けなかったから、来年行ってみよう!と思ってくださる方がいるということです。また、ご年配の先輩では、もしかしたら来年は元気に出かけられない、会えないかもしれない……と大きく深い思いでこの会に参加されているということです。そんな思いから小規模であっても、毎年開催する意義は大きいと思っています。

昨年参加できなかった卒業生の皆さん、どうぞ今年はご参加ください。懐かしいキャンパスで皆さんのお帰りをお待ちしております。

新任教員メッセージ

対照研究と教育

外国語学部教授　井上　優



私の専門は言語学です。主な研究対象は日本語の文法ですが、日本語と中国語の文法の対照研究をすることもあります。対照研究とは「二つの言語を公平に見られる観点を見出す」研究です。外国語を勉強していると、自分の母語との違いに「なぜ?」と思うことがよくあります。そのようなことがらに対して、「こう考えれば、自分の母語のことも、一見不思議な外国語のことも、ともに自然なこととして理解できる」という説明を考えるのが対照研究です。簡単な例でその感覚を説明します。

一般には「中国人ははっきり言う。日本人ははっきり言わない」というイメージがあるようです。日本人も中国人もそう思っていて、互いに「なぜ中国人は……」、「なぜ日本人は……」と思うことも多いようです。しかし、中国人が「はっきり言う」のと日本人が「はっきり言わない」のは実は同じことです。それは「相手が次にものを言いやすいように言う」ということです。中国語のコミュニケーションは将棋と同じです。将棋では一手指さないと次の一手が指せない。それと同じように、はっきり「こうだ」と言わないと相手が「次に何を言うか」を考えにくい。だからはっきり言う。これが中国語の感覚です。一方、日本語で相手にものを言うのは講演依頼と同じです。講演依頼の際には、内容に関する細かい指定はせずに、できるだ

け相手が自由に話せるようにする。それと同じように、自分からは「こうだ」と言わないほうが相手が自由に「次に何を言うか」を考えられる。だからはっきり言わない。これが日本語の感覚です。中国人が「はっきり言う」感覚、日本人が「はっきり言わない」感覚は、ともに相手に対する気配りであり、（少なくとも頭では）互いに十分理解可能な感覚だと言えます。

対照研究と言うと大げさな感じがするかもしれません。しかし，二つのものを公平な視点から見ようとする感覚自体は人がよりよく生きるために必要不可欠なものです。教育の場でもそのことを伝えたいと思っています。

新任教員メッセージ

生きる力を育む英語教育を目指して

外国語学部助教　北原賢一



二〇一一年、日本で生まれ日本に生きる者にとって永遠に忘れることのできない災厄の年、私は本学外国語学部に助教として着任しました。専任教員として着任する前も二年半ほど、非常勤講師としてお世話になっていたので、麗澤との関わりは四年目を迎えます。麗澤での一つの節目となる年、あのような甚大な天災が起きたことに、何かの意味を感じずにはおれません。「麗澤」という名前にはこれまで馴染みがありませんでした。東京の知人に聞いてみても本学の名前を誰も知らない。これはもったいないことです。確かに、外国語学部と経済学部しかない小さな大学かもしれませんが、その校風はリベラル・アーツ・カレッジ（アメリカの全寮制少人数四年制教育の大学）を彷彿とさせ、学生同士のみならず、教員、職員が一緒になってお互いに切磋琢磨している。このような自由な友誼に溢れた学びの空間はもっと世に誇るべきことです。

今年起きた数々の出来事は、平和だと信じてきた私たちの固定観念を揺さぶり、ひたすら利便性を追求してきた生き方そのものに大きな衝撃を与えました。ようやく復興の兆しが見え始めたものの、いまだ終息しない原発の問題を抱えたまま、国際社会の激動する地殻変動の中で、今後どう生きていけばよいのかを改めて問い直さずにはおれません。

麗澤での学びは、そうした世の変化にあって、常に「生きる力を育てる」ものでなければなりません。「師弟同学」という麗澤だからこそ可能となる教育です。私も専門とする英語学を道標として、私たちが生きる今、そしてこれからを考え、自分で未来を切り開いていく力、知・徳をあわせ持つ学生を育む本学の教育に微力ながら貢献して参ります。

新任教員メッセージ

一年が経ち思うこと―抱負にかえて

外国語学部助教　竹内拓史



私が昨年の四月に麗澤大学に奉職してから一年が経ち二回目の桜が咲きました。それはまた、東日本大震災から二回目の桜が咲き一年以上が経過したということでもあります。一年前に離れた故郷の宮城県に帰るたび私はその傷跡の大きさに言葉を失ってしまうのですが、さりとていったい自分には何ができるのかと日々迷いつつこの一年過ごしてきたように思えます。

麗澤大学も震災の被害を免れませんでしたが、この困難な時にも私のような新任教員を採用し、教壇に立つ機会を与えてくださった廣池学園ならびに麗澤大学にこの場を借りて心より感謝申し上げます。いつの時も真摯に教育と研究に向き合い続けることがせめて自分にできること、しなければならないことのひとつだと改めて強く思うのですが、それも麗澤大学で一教員として働いていられるからこそでしょう。この初心を忘れずにこつこつと働き続けることで、このご恩にいつかわずかでも報いることができれば幸いです。

私の研究について少々書かせていただきますと、専門はドイツ文学で、特に十九世紀初頭のゲオルク・ビューヒナーという作家を中心に扱ってきました。最近私も携わった彼の新しい翻訳全集が刊行されましたので、ご一読いただければ幸いです。また最近は、戦後のドイツ社会に文学者がどのように関わってきたのかについても研究を進めています。ドイツの戦後の道のりは極めて困難かつ複雑なものでしたが、その考察はドイツのみならず、戦後の日本社会を考えるうえでも参考になると考えています。今後の研究が、わずかなりとも震災後も含めた現代日本の姿を考える一助になればと思う次第です。

新任教員メッセージ

経済学教育の意義と抱負

経済学部助教　齋藤雅元



私たちが日頃から新聞やテレビで見聞きするさまざまな経済問題は、非常に多くの複雑な要因が相互に関連し合っています。しかしながら、ただ複雑なまま経済問題を考えていては、問題の解決策または対応策を明確に提示することが難しくなります。経済学は理論によってその問題解決の糸口を模索します。具体的に、経済理論は関連する経済主体（消費者、企業、政府など）の意思決定や相互関係を抽象化した「モデル」を用いて、当該問題の分析や解釈を行います。抽象化された「モデル」は問題に関連のある部分を強調しているので、ある事象の本質をとらえるという点で非常に優れた表現方法のひとつであるといえます。

消費者や企業など個別の経済主体の意思決定問題を対象とするミクロ経済学や一国全体の経済活動を対象

とするマクロ経済学は、共に「モデル」を駆使することによってその内容が展開されています。経済学で扱われる「モデル」を学習する際には、数学的知識が必要です。現在、私は本学経済学部でミクロ経済学とマクロ経済学の両科目を担当していますが、使用する数学と経済学的な意味とを上手くリンクさせるよう心がけて講義を行っています。そして、このような数学的表現方法および経済学的内容とその意味を丁寧に伝えることで、複雑な経済問題を紐解く「論理力」や「直観力」という重要な能力を学生に身につけてもらいたいと考えています。これらの能力を真に社会に役立てるため、今後とも「知徳一体」という麗澤大学の教育理念に適った人材育成を目指し、その一助になるよう努めたいと思っています。

新任教員メッセージ

競争ルールの公平性と〈三方よし〉の精神

経済学部助教 溝口哲郎



戦後日本は驚異的な経済成長によって、経済大国となりました。ところがその後日本経済は二十年間停滞を続け、その構造内にある歪みの問題を浮き彫りにしています。この問題の一因は、「競争ルールの公正性」の理念が日本社会に浸透していないことにあります。

アダム・スミスは『道徳感情論』において、「個人は現在より高い社会的地位を得る目的によって富を追求する。ところがその過程で社会秩序を乱す危険性がある」と指摘しています。私たちは他者との競争を通じてより高い社会的地位を獲得する可能性を持っています。そしてその競争は公正なルールに基づいて行われなければなりません。そうでなければルール違反や不正が横行し、その結果社会に歪みが生じてしまう恐れがあります。つまり競争ルールの公平性を遵守するということは、健全な経済社会を維持するための条件であると考えられます。しかしその条件だけで健全な経済社会が維持できるのでしょうか。たとえ競争ルールが公平であったとしても、その結果が公平であるとは限らないのが格差社会となった日本の現状です。

そこで廣池千九郎先生の提唱した「三方よし」という概念について考えてみましょう。「三方よし」には、自分・相手のみならず、第三者を含めたすべての人への利害を考えた上で行動する、という意味合いがあります。私はこの「三方よし」を意識した「競争ルールの公平性」を日本経済に適用していくことが、結果の公平性をより高め、牽いては格差の是正に役立つのではないかと考えます。

本学において私は「三方よし」の精神を踏まえ、競争ルールの公平性に支えられた「市場メカニズム」の重要性についての研究活動に励み、「三方よし」の精神に基づいた競争ルールの公正性を遵守できるような人材教育を行っていけるように努力したいと考えています。

卒業生の今①

麗澤健児の十年間

山九株式会社　田口雅章
（第六十期　中国語学科卒）



麗澤には麗澤瑞浪高等学校定時制四年、麗澤大学外国語学部中国語学科四年と計八年お世話になりました。卒業後は北九州を発祥とした物流会社へ二〇〇一年四月に入社、三年目の二〇〇三年に中国の広州地区にある現地法人へ出向を命じられました。それから七年半の中国勤務を経て、二〇一〇年に茨城県神栖市への転勤となり、現在は鹿島コンビナートの麓で勤務しております。

早いもので麗澤を卒業して十年が経ちました。今回「卒業生の今」について執筆する機会をいただきましたので、卒業後の十年間を振り返り、麗澤での経験がどのように生かされているのか考えてみました。

一つ目は高校時代の厳しい寮生活や瑞浪高原ゴルフ場の仕事で培った経験についてです。

高校時代の寮生活はとくに厳しい環境で、今でも鮮明に覚えております。一年生から四年生までが同じ部屋で生活を共にし、厳しい上下関係の中、規律や礼儀の大切さを学んだことが、現在の仕事での上司、部下との接し方の基本となっております。また仕事としてキャディーやコース管理などを経験しました。キャディーの時は、どうやったらお客さんが喜ぶのか一生懸命に考え、工夫していたことが現在の営業力に繋がっていると思います。思い出としてはキャディーの時にお客さんからチップの代わりに貰ったお菓子、缶コーヒーを寮の部屋に勲章のように並べていたことです。また中年に差し掛かった今だから感じることですが、キャディーは男子高生がつくより女子高生がついた方がどれほどお客さんは喜んだことかと思い返します。当時は純粋でした。



近況写真

二つ目は大学時代に中国語を学び、中国と繋がりを持つことができたことです。

私が中国語を専攻したキッカケは、高校四年生の時、進路で悩んでいた私に、担任の先生である今井栄一先生が今後、中国語を勉強することは将来役に立つと背中を押してくれたことから始まります。そして大学へ入学し、中国語を学び卒業を迎えた二〇〇一年、当時は就職の氷河期にあたり大変厳しい時期でしたが、中国語を勉強していたことで今の会社と縁があり入社できました。

中国では、二〇〇三年三月から二〇一〇年十月まで駐在しておりました。赴任当初、広州ではＳＡＲＳ（サーズ）が蔓延しており会社からは帰国するなとの命令がありました。その当時は、仕事量が減っていて、ＳＡＲＳの危険地手当で平日ゴルフをしたことが思い出です。二年目は鳥インフルエンザが流行、三年目は対日デモが広州市内で発生して、最初は大変なところにきてしまったとの感じが強かったです。ただその間にもホンダに続き、日産、トヨタなどの日系の自動車メーカーとその関連企業の進出ラッシュが始まり、都市のインフラや生活環境、工業化などの開発が一気に進みました。昨年広州で開催されたアジア競技大会の時には広州市内の様相は一大近代都市に一変するなど、日本の高度成長期と同じような経験をできたことはとても貴重な体験でした。

そのような環境の中、仕事では中国に進出する多くの日系企業を相手に最適な物流の提案を行い、日本ではお付き合いすることのできないメーカーや、いろい

ろな業種の物流を経験することができました。一方社内では中国人の同僚と政治的な日中問題は抜きで共に会社を成長させることに一生懸命に打ち込みました。

仕事の契約については、日系企業同士の契約でも中国語で締結することが多かったのですが、三潴正道先生のひたすら人民日報を購読するレベルの授業を受けていた事で、この難関にも真正面から向き合うことができました。

日本では中国のことをいろいろ悪く報道されますが、これは少なからずメディアの弊害であると思います。私が接した中国人は良い人、難しい人、明るい人、暗い人といろいろな人がいましたが、どの中国人の方も基本的な部分で日本人とはそんなに変わらないと感じました。とても素朴で目の前にあることに一生懸命に打ち込む姿や、会社の行事である運動会、社員旅行などは皆積極的に参加する姿を見ていると、一昔前の古きよき時代の日本人の気持ちを持ち合わせているような印象も感じられました。

こういった中国の良い一面を知ることができたのも、麗澤で中国語を学び、中国と接する機会を与えていただいたからだと思います。「百聞不如一見（百聞は一見にしかず）」という言葉は、中国から伝わった言葉ですが、本当に聞くより実際に見て感じることは重要だと思います。

三つ目は中国で活躍されている麗澤大学の卒業生の方は多く、麗澤の名の元に繋がることができたことです。

会社に入社後三年目で、同期の中では先んじて中国の広州にある現地法人へ海外出向を命じられました。その当時、私の中国語は仕事で使えるレベルではなかったのですが、同じ会社の麗澤大学の先輩がすでに中国で活躍されていたこともあり、私の実力以上に中国語が出来ると会社側が認識したことが要因だったのではないかと振り返っております。

広州に赴任後も、広州日本人商工会の新年会において、大学で学んだ空手道の演武を麗澤の後輩と共に披露したときに、道着に書かれた麗澤の文字を見て声をかけてくれた先輩がいたり、広州麗澤会を通じていろいろな先輩方とお付き合いすることができました。某セキュリティー会社に務め、無錫、蘇州、広州、西安と中国を渡り歩いている後輩の桐田一義君には、仕事でも物流センターのセキュリティーでお世話になりました。現在でも西安の第一線で新規事業開拓に活躍しておりますが、独身なのがチョット気がかりです。素敵な嫁さんが早く見つかることを日本より祈っております。



広州日本人商工会での空手の演舞（左が田口氏）

いろいろと乱筆乱文となってしまいましたが、最後に今回改めて考え直してみると、麗澤で過ごした八年間が私の社会人生活での基礎になっていると強く感じました。また今回ホームカミングデイに招待され、麗澤に戻る機会をいただきましたが、戻る場所があるということは、社会人として成長した姿を報告する場があることだと感じました。今回久々に学校の雰囲気を感じ、学生の若いエネルギーを感じ英気を養うことができました。また次の十年ですが、サラリーマン戦線を戦っていき、一回りも二回りも大きな社会人になって戻れるよう頑張っていきます。

途中困難、最後必勝、麗澤健児万歳！　押忍!!

卒業生の今②

麗澤の春

杉田紀子
〈旧姓　岩崎〉
（第五十八期　中国語学科卒）



麗澤大学に入学してすぐ、主人と素晴らしい仲間達と恩師に出会うことができました。今思えば宝くじに当たるくらいラッキーだったのではないかと思わせるこの出会いが、私の人生の中でとても大事な部分を占めています。

中国語の授業は難しく大変でしたが、その他の大学生活は何をしていても楽しい日々でした。積極的に寮長や麗陵祭、中国語学科学生会や中国語劇、バレーボールサークル、そして親から禁止されていた居酒屋でのアルバイト。仲間と行ったアメリカ横断旅行、台湾留学、中国バックパッカーの旅。本当に悔いなくいろいろなことを一所懸命にやりつくしました。

先生方は研究室で本当によく学生の話を聞いてくださいました。他愛もない話から真面目な人生相談まで話が尽きることがありませんでした。自宅に招いて料理を振る舞ってくださったり一緒に居酒屋に行ったりと、本当に学生と先生の距離が近い麗澤大学は他大学の友人に聞いても珍しく、自慢できる特色の一つだと思います。

寮生活は留学生も交え毎日毎日修学旅行のようでした。私の思い描いていた大学生活はもっとさっぱりとしたものでしたので、あのように密に先生方や仲間達と関わっていけたことが本当に幸せでした。

私の大学生活で思い出に残っていることを文章にすると原稿用紙何枚あっても足りないくらいです。いつも仲間と一緒に何かを考えたり、語り合い行動を起こしていたと思い出します。大変なこともありましたが、若さという有り余るほどのエネルギーと仲間たちとのチームワークで乗り越えられたのだと思います。傍観していないで何かアクションを起こしてみる！　まずやってみる！　ということは主婦になった今も子供の小学校や幼稚園の役員で新しいことを提案したり、人が嫌がって引き受けないようなことでも頑張ってみたり、あの頃のことの経験が活きていると思います。



アメリカ横断旅行　バス、列車、レンタカーで
1か月の旅（1997年）

さて、現在私は三児の母です。クラスメートであった主人とは入学から十八年の仲でお互いを信頼し合えるとても良きパートナーです。学生時代は些細なことでケンカをしましたが、仲間にもずいぶん助けられ今では笑い話となりました。学生時代に学んだよく話し合ってお互いを理解する、夫婦でも日常の挨拶はもちろん、感謝の言葉を口に出して言うということが自然に身についているのも麗澤で過ごした時間のおかげだと思います。

三人目の子の出産を機に専業主婦になりましたが、私の実家は葬祭業を営んでおり、ほぼ年中無休の両親を見て育ちましたので働かないなんて想像もつきませ



ご主人・弘祐氏と３人のお子さん

んでした。

以前は専業主婦なんて、と思ってしまった自分がいますが、それはそれはとても贅沢なものなのです。確かに子供が三人もおりますと慌ただしい毎日ですが、ちゃんと自分の楽しみを見つけ、そして子供と向き合う時間をつくり、外で働いてくる旦那様の帰りを待つ。想像以上に良いものなのです！

昼間は主人をはじめ子供たちもそれぞれの社会環境の中で頑張っていると思います。外で何かあっても「家に帰ろう、家族が待っている。ホッとできるなぁ」と思ってくれるような、そんな家であり、母であり妻でありたいです。

私は自分で高校を四年やると決め、休学しての一年間の留学。アメリカの大学を受ける準備を始めた矢先に麗澤大学に出会い周りが驚くほど急遽方向転換し中国語学科へ。両親と二時間の距離を電車で通う約束のはずが、秘密の花園女子寮五号館にどっぷり四年間。すごく行きたい！　という会社がなく、とりあえずの就職というのは嫌で、普通に就職をせずインターンをやると決めたり。今思うと三人姉妹の末っ子の我儘に両親は「親の思い通りにはならないな……」と胸の痛いことも多々あったと思います。

親の思い通りに子供は育たない。自分や主人もそうだったのだから自分たちの子供に強要はしてはいけない。理不尽なことで叱ってはいけない。分かってはいるのですが難しいのです。

思い出さなくてはならないのが、以前恩師から褒めることと許すことを学んだことです。大きな懐で包んであげるのです。私達夫婦が恩師にしていただいたように。

子どもから手が離れるようになれば私もまた仕事に復帰するつもりですが、すぐに大きくなってしまう子供たちと親の私もゆっくり一緒に人として育っていきたいです。

長年にわたり私の実家では海外からの留学生を預かることもあり英語を話す機会が度々あります。近年では子供の習い事で中国人のお母さんがいたので中国語を使う機会もありました。大学時代に勉強をもっとしておけばよかったなぁと反省する反面、やはりコミュニケーション能力があるかないかだと実感しました。それは私自身の留学や大学生活でも痛感したことであります。自分の子供達にも、机の上だけの勉強でなく、「話をよく聞く、よく話す」という能力が伸ばせるよう、子供との対話を大切にしていきたいと思っています。

有難いことにこの春で結婚十周年を迎えます。夫婦として家族として同じ方向を向いて一緒に歩いてくれる主人。麗澤時代からの大切な仲間達と恩師。一番側で見守っていてくれるお互いの両親。私達を支えてくれている方々へ感謝を忘れないようにしたいです。

これを機になおいっそう夫婦の絆、家族の絆を深め、何年経っても「モラロジー広場でお花見しよう」などと私たちの原点である麗澤の春に足を運びたいと思います。

麗澤での一期一会。数えきれないほどの貴重な経験。間違いなく私の一生の宝物です。

最後に十周年という節目に学生生活を振り返る機会を与えてくださったことに感謝いたします。ありがとうございました。



今でも長く深く付き合える仲間たちに出会えた春
（入学時の「谷川フレッシュマンキャンプ」）

卒業生の今③

麗澤での出会い、学び、成長、これまでも、これからも

学生課　櫻井大士
（第六十二期　国際産業情報学科卒）



私は現在、学校法人廣池学園の職員として、大学時代に青春を謳歌した麗澤大学に勤務して二年目になります。学生時代には、自分が通っている大学で職員として働く事など、想像もしていませんでした。

平成八年四月、中学を卒業し、まだまだ幼さの残る十五歳の時、親元を離れ岐阜県瑞浪市の山中にある麗澤瑞浪高等学校に入学しました。麗澤瑞浪への入学は私自身、麗澤教育を学ぶスタートであり、大きな成長を遂げた場であったと感じます。特に、三年間の寮生活は思い出深いものがあります。

一年生の時には、厳しさも優しさもある先輩方の指導で、目上の方への言葉遣い、接し方など、今となっても身になっている事が沢山あります。ただ、中には理不尽な指導も正直ありましたが、そういった経験もまた社会で生きていく上で、辛い事を乗り越える我慢強さを身に付けられたのではないでしょうか。

三年生の時には寮長に任命され、寮生を指導して寮全体を統括する立場も経験させて頂きました。場合によっては寮生に対し強く注意や指導をおこない、嫌われ役となり、孤独感を感じ辛い時もありました。元々その当時の私は、リーダーとしての資質はなかったのですが、寮長として相応しく、立場に負けないよう常に心掛けていました。そして、人を引っ張ったり、まとめる難しさを知り、「リーダーたる者とは」を学べ、



本当にすばらしい体験ができたと感じています。

また、寮生活を過ごすにあたり、チューターである清水茂晴先生の存在は欠かせない存在でした。親元を離れ生活する学生の親代わりとして、優しくまた、時に厳しく叱られる事もあり、道を逸れず三年間無事に生活を出来たのも清水先生がいたからではないでしょうか。

辛い事、楽しい事、普通に自宅で生活していれば経験出来ない事が寮生活で経験出来ました。上下関係への配慮、また歳上を敬う心がこの頃から身に付いてきた気がします。

余談ですが、三年生の時に廣池幹堂理事長のご子息である慶一君が入学し、私が寮長兼部屋長をしている部屋に入ってもらい、数か月間ですが一緒に生活をしました。今思うと、慶一君との出会いもまた廣池学園に就職を決めた要因の一つではなかったかと思います。

平成十一年四月、私は指定校推薦で麗澤大学国際経済学部国際産業情報学科に入学しました。国際産業情報学科は私が入学した年に開設された新しい学科で、学科一期生として入学しました。私は出身が兵庫県姫路市という事もあり、関西方面での進学を考えて受験勉強をしており、麗澤大学への受験は考えておりませんでした。ですが、情報化社会が進む中、今後の可能

性を感じ、情報系の学部や学科を志望していた私にとって国際産業情報学科が開設されると聞き、麗澤大学が選択肢の一つとなりました。最終的には指定校推薦で麗澤大学への進学を決めたのですが、大学時代もまた私にとって大きな成長を遂げる場であり、また、廣池学園に就職を決めるきっかけとなった人々との出会いがありました。

大学時代で一番大きな出来事は、私が一年次生の時に、実家で写植業を営んでいた父親が、バブル景気崩壊後の経済不況の煽りと、情報化社会が進み仕事が減少する中、自己破産した事でした。その影響で親からは「二年次以降の学費と寮費を払う事が出来ない」と言われ、私自身退学を考え、大学の職員の方々に相談しました。職員の方々は、収入にあった授業料・寮費の分割による支払い等、一学生に対し非常に親身になり時間を掛け卒業するための方法を考えて下さいました。私自身、大学に対し未練がない訳ではなかったため、職員の方々の対応が非常に心強かったと記憶しております。そして、私は在学する道を選びました。それからの学生生活はアルバイト中心の生活になり、自由な時間や自由に使えるお金は少なく、決して楽な生活ではありませんでした。ですが、お金の大切さや、職員の方々の暖かい優しさ、周りの助けがあり自分が生活出来ている事、人として大切な経験を積む事が出来たと感じます。

卒業後はアルバイト時代に知り合った方が務めていた会社を紹介して頂き、大学で学んだ情報のスキルを活かそうとオープン系のソフトウェア開発を主に手掛けている会社に就職しました。会社を辞めるまでの一年七か月の間、電力会社向け部品管理システムの開発、製造系の在庫管理システムの開発、金融系のウェブシステムの運用・保守開発に携わりました。大きな会社ではなかった事もあり、任せてもらえる仕事も多く、早い時期から開発や設計まで経験出来、日々エンジニアとしてのスキルを身につける事が出来ました。

二社目は、知人が起業したシステム会社に転職しました。知人が起業する際に声を掛けて頂き、自分自身の成長を考え転職を決意しました。携わった業務は金融系のウェブシステムの運用・保守開発で、その中でも新たな開発や既存システムのカスタマイズを企画・提案しておりました。

そして、社会人としてシステムエンジニアとして七年目の年に、両親から突然、廣池学園の職員採用試験を勧められました。当初は、順調に培ってきたシステムのスキルや人脈を捨てて、他の業界へ転職する事など到底考えられませんでした。ですが、採用試験の出願期間が近づくにつれ、職員への志望を強く感じ始めたのです。そのきっかけが、人事に勤務していた大学の部活動の先輩に相談した事です。その際に先輩が持つ学園への想いを感じ、また相談した事で私が今まで麗澤で受けてきた恩を、麗澤に返したいという想いが生まれ学園の採用試験を受ける決意をしました。

私は現在、麗澤大学の学務部学生課に所属しております。私の主な業務は、課外活動の団体・大学祭を企画し運営する委員会のお手伝いです。学生課の業務は、他に奨学金や寮の管理・運営等、非常に学生との接点の多い部署にで、学生からすれば親以外の社会人と接する機会となり、その出会いの中で、私は学生が少しでも社会で活躍するため、社会に出ていく上での心構えが培われればと思い接しています。学生達が多くの方から支えられている事をしっかり理解し、大きな目標を持ち、成長し、社会に飛び立ってくれる事を願いながら学生と共に過ごしています。職員としては、もっともっと学生のため、また社会のために貢献出来るよう精進したいと思います。



コラム

学生課に来て三年、思うこと

学生課　小川　勝



私は、昭和五十七年、廣池学園に研修職員として採用されました。当初から食堂部門に配属され、三年間中央食堂で学生の食事を作っていました。当時、高校は全寮制で約七百人が朝、昼、夕と食事をし、モラロジー研究所の講座等があれば、千人以上の人が食事をしていました。そのため、ただ食事を作るだけ一日が終わってしまう毎日でした。その後、今はありませんが北海道社会教育センターで三年、麗澤瑞浪食堂で六年、谷川生涯学習センター（谷川セミナーハウス）で十二年、廣池学園れいたくキャンパスプラザで七年とあまり学校教育と関係ない部門におりました。如何に食事や施設を利用される方に満足していただき、かつ収益を上げ、楽しく働ける場を作りに励んでいました。

ところが、平成二十一年四月、人事異動で麗澤大学学生課に移動となりました。今まで経験したことの無い学校教育部門で、なおかつ大学を出ていない私が高等教育の場で正直言って務めることができるのか不安でした。その頃は、食事部門を離れ、フロント業務をしており人との接触にはある程度慣れてはいましたが、社会人相手とは違い、自分の子供といっていいぐらい人たちを相手にすることは初めてであり、ましてや大学というまったく知らない場所で務めることができるのか大きな不安でした。私のイメージでは学生課という部署は、ひっきりなしに窓口に学生が訪れ、対応に追われる事務処理が中心というものでした。

確かに四月、五月新年度新学期という時期は奨学金の受付、定期購入の手続き等の窓口対応や事務処理が多く、思った通りの部署だなと思っていました。転属早々、井出学長補佐から、「学生課という部署は、大学においては学生の母親のようなものです。母親のように包み込むように学生を支援していかなければならないし、誤ったことをすれば厳しく律しなければなりません。母親の気持ちで学生に接することが大切です」と言われ最初理解できませんでしたが、転属して二カ月学生間での揉め事から始まり、学外近隣の苦情対応、課外活動でのトラブル等々様々な案件や相談が寄せられ、それに対していかに対応して学生を支援していくかが学生課の大きな役割であり最も重要なことであると認識させられました。本来学生課の目的、目標は、学生に建学の精神の具現化である「思いやりの心」を育て、安全な充実したキャンパスライフを過ごせるよう学生生活を支援することにあります。

それでは「思いやりの心」を育てるには何をしたらいいか、私自身第一歩として学生に対して積極的に挨拶すること心掛けました。学生課の窓口だけでなく、いろいろな場所で学生に会えば挨拶をする。当初なかなか返してはくれないのではと思っていましたが、ほとんどの学生が笑顔で挨拶をかえしてくれました。麗澤大学生、意外といいかもと思ったものです。あれから三年、自分自身は転属した時と変わらない気持ちでいたつもりでした。大きな声での挨拶、明るい応対を心掛け、学生が気軽に入り易い明るい学生課を目指していました。それが浸透していると思っていました。

ところが、平成二十三年十一月に三年次生を対象に、学生アンケートを行い、窓口対応やキャンパスライフなど学生の満足度調査をおこないました。窓口の対応では、「親切、丁寧、優しい」といった印象面のコメントが多い半面、逆に「冷たい、無愛想、ぞんざい」といった真逆のコメントも多く寄せられていました。本来、窓口業務は均一であり相手によって対応が違うとかあってはならないことです。対応如何によっては二度と学生課に来ない場合も起こり得ます。確か

に特に必要なければ、四年間一度も学生課に来たことが無い学生もいたり、学生課がどこにあるかさえ分からない学生もいます。しかし、中には相談に行きたくても、たった一度の印象により二の足を踏む場合もあります。相談できず一人悩み結局、手遅れになってしまうことがあるかもしれません。自分自身変わらない心でいたつもりが、三年経ち、いつのまにか「慣れ」てしまい、おざなりな対応をしていたのではないかと反省させられました。

平成二十四年四月、より学生が親しみを持てるよう学生課は学生支援グループとして名称が変わります。名称だけでなく本当に学生が気軽に入り易く親しみのもてる明るい学生支援グループになるよう目指していきます。

コラム

たったひとりの麗澤の先生

学生相談センターカウンセラー　阿部千香子



私は麗澤の卒業生ではなく、同窓会にも入っておりません。唯一「麗澤教育」とご縁があったのは麗澤保育園と幼稚園の二年間です。麗澤保育園にて一年間を過ごし、翌年に麗澤幼稚園が設立され、一期生として入園しました。タイトルにある「麗澤教育」を受けていない（受けたとしてもほぼ覚えていない）私が、本誌で文章を書かせていただいてもよいのだろうか、とためらう気持ちを抱えつつ、せめてもと、幼稚園の時のことを思い起こしています。

幼稚園時代の私は（今もそうですが）、ひどく身体の弱い子でした。だからこそか、感受性の強い、繊細な子でもありました。そのために、周囲の子どもたちと同じように動けなかったり、幼稚園の先生の指示ひとつひとつに「なぜ」と理由を求めてしまったりして、行動に時間がかかりがちでした。私が人より時間を必要としていても、幼稚園は集団生活です。私の心地よいペースや内側から湧いてくる思いを待っているわけにはいきません。平均的な子どもに合った活動が、平均的なペースで、こなされていきます。多くの子どもたちはそれに敏感に反応して、喜び、楽しんでいます。しかし、身体の脆弱さと心の繊細さから、ひとつひとつの行動にたいへんなエネルギーと自問自答を必要としていた私には、その動きは早すぎるものでした。自分の内側のしんどさや違和感を置き捨てて、周りの動

きに「とりあえず」ついていくことはできましたが、それには孤独と緊張が伴いました。世界が求めるのは、今の自分の速度よりも速く、今の自分の強度よりも強く、であることと感じ、「世界はありのままの自分では生きにくい場所」と学習しました。じゃあそんな世界でどうやって生きぬいていくか？　私は大人の望む姿を演じることを覚えました。幼稚園の先生が好む子。活発で、利発で、ユーモアのある、そんな子。「なぜ人は人をいじめるの」「食べることは苦しいことなの（弁当を残さず食べると言う教育に対して）」「どうして生きるの、いつか死ぬんだから無駄じゃない」…様々な疑問を、大人の望む子どもであり続けるために、自分の内側だけにとどめることを覚えました。口にするのは、「なんで座るときに足を閉じなくちゃいけないの？」程度の、先生の笑いを誘うような、当たり障りのない疑問だけにしていました。



さて、当時の園長は久野和雄先生でした。私の記憶にある、私が「麗澤教育」を受けた「園長先生」です。園長先生は動物がお好きで、園内には常に動物がいました。うさぎやあひるといった教育機関でよく見かける動物はもちろん、驚くことに蛇も飼っていました。一般的には忌み嫌われがちな動物をあえて子どもたちのそばに置くことで、どの動物のいのちも尊い、どの子どものあり方も尊い、ということを教えてくださっていたのでしょう。そういう先生の隠れたメッセージを言葉としては受け取れずにいても、感覚的に受け取ってか、私は先生が大好きでした。それは「この人なら安心」という「好き」でした。先生の近くにいるときは、大人受けを狙った饒舌さといった演技を捨て、ただ静かに隣にいて、あたたかい空気を感じ、安心していられたことを覚えています。それを知ってか知らずか、先生はよく私のそばにいてくれました。今思えば、いつも子どもたちの中心にいて、主役をつとめる活発な私が、内側にたくさんの疑問や傷つきを抱えている、そのことに気づいておられたのかもしれません。

ある日のことでした。いつものようにやんちゃな男の子たちがたくさんの蟻を踏みつぶしました。そういったことは子どもの頃にはよくあることです。大人がしたら残酷な行為でも、子どもはそれを通じて生きることと死ぬことを学習していきます。私もそういうことをたくさんしたのでしょう。けれどそのときの私は、「もし私が蟻で、突然大きな生き物に踏みつぶされたら、どんなに痛いだろう」「踏みつぶされるのが私のお父さんやお母さんだったら、私はどんなに悲しいだろう」と考えて胸を痛めました。子どもの身体と心は、大人以上に強く結びついています。文字通り、胸が苦しくて痛くて、涙が出てきました。踏みつぶす行為を止められなかったことを「ごめんなさい、ごめんなさい」と泣いて謝りながら、私は、蟻一匹一匹にお墓を作りました。現在の私の視点から見れば、それは、いのちを助けられなかった無力感と罪悪感から、なんとかして抜け出して、自分を許すためにしていたこと、と理解できます。担任の先生はきっと、心配しながら声をかけてくださったことでしょう。でも、そのとき混乱していた私の記憶には残っていません。記憶にあるのは、園長先生が、いつからか隣にいてくださったことです。先生は、延々とお墓を作り続ける私を止めることはありませんでした。私が納得するまで、ただ隣で見守っていてくれました。そのときのことを思い出すと、私は、とても安心するのです。自分が役に立たない存在や、悪い存在であると感じて、もがき苦しんでいるとき、黙って隣にいてくれる人がいた。「役に立たない、悪い、苦しんでいる、ままのあなたでいい」、そう抱きとめられているような感じがするのです。

「世界はありのままの私では生きにくい、ただ、ときにはありのままの私に寄り添ってくれる人がいる」。幼稚園生の私は、そう、学習をしたことでしょう。

時が過ぎて、思春期・青年期を迎えて、「生きづらさ」はより明確になり、無力感はより頻繁に私を襲いました。「世界はありのままでの私では生きにくい」だけであったら、私は無力感に負けて、人間社会とそこで生きることに絶望し、投げ出していたかもしれません。けれど私は、人に理解されたいと願うことも、それを求め続けながら生きようとすることも、やめませんでした。苦しみながらももがき続けることができたのは、あのときの「ただ、ときにはありのままの私に寄り添ってくれる人がいる」という学習があったからに違いありません。

昨年、大きな災厄が私たちを襲いました。同時に、強い無力感が私を襲いました。あの日から数カ月間、倒れた人を抱き起こす夢を繰り返し見続けました。それは、お墓を作り続けたときと同じ感覚でした。同時に、園長先生が寄り添ってくれている感覚が思い起こされました。三十年以上前に出逢った、私の覚えているたったひとりの麗澤の先生は、私が絶望しかけるとき、いつも寄り添っていてくれます。私を決して独りぼっちにしません。今も。

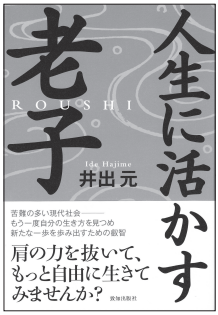
オススメ図書紹介

『人生に活かす老子』

井出　元（麗澤大学教授）著

致知出版社・四六判・定価一六八〇円（税込）

〈平成二十三年十一月二十四日発行〉



『老子』は『論語』と並んで中国の伝統的な文化を象徴する古典です。両者は、一見対照的なものですが、決して対立し排斥しあうものではありません。理想を高く掲げ、平和な社会をめざす孔子の立場と、しっかりと現実を見据え、一人ひとりの安心と幸福を求める老子の立場とは、それぞれの役割を担い中国文化に深く根を下ろし、悠久の歴史を経て東アジアの精神文化を育んだのです。

殊に老子によって展開された「道を自覚することによって人としての真の安心を得ることができる」という哲学は、唯一の価値に目覚めることの重要性を説いたものであり、それは砂漠の民が「神」を創造したことに匹敵する文化史的な意義をもつものです。しかし、老子は彼岸とか来世に救いを求めることなく、あくまで現世における日々の生活を重んじ、「道」に目覚めた人の生き方を示唆しました。

更に現代の社会に身を置き、競争社会に巻き込まれて、心の安らぎを見失いつつある人たちに対して、もっと楽な気持ちで穏やかに生きることを提案しました。そして、人生に最も必要なことは何かを改めて考えようと呼びかけ、私たち一人ひとりが静かに人生を顧み、自らの進む方向を自分自身で決めるための「場」を用意したのです。そこで、現代の立場から六十四か条の質問を用意し、老子との対話を試みました。本書は、次の五章なら成り立っています。

第一章　「真実の道」を生きる―もっと穏やかに
第二章　心の平和を保つ―もっと豊かに
第三章　よりよい社会を築く智恵―もっと自然に
第四章　運命・境遇を受け入れて生きる―もっと自由に
第五章　「人生の達人をめざす」―もっと謙虚に

オススメ 図書紹介

『人間力を伸ばす珠玉の言葉――箴は鍼なり』

中山　理（麗澤大学学長）・渡部昇一（上智大学名誉教授）著

公益財団法人モラロジー研究所・四六判・定価一五七五円（税込）

（平成二十三年十二月十日発行）



「自分をいかに成長させ、いかに生きるか」ということは、時代や国籍の違いにかかわらず、また老若男女の誰もが生涯にわたって抱える課題ではないでしょうか。

このたび、本学の中山理学長と知の巨人・渡部昇一氏（上智大学名誉教授）が、この誰もが抱えるこの課題について、古今東西の聖賢の格言や名言を取り上げながら語り合った内容を単行本化しました。

副題の「箴は鍼なり」とは、「聖人の箴言や戒めの言葉は、心に刺し込む鍼のようなものである」という意。鍼が身体の疲れを癒すように、先人が残した格言や箴言には、現代人の心を癒し、未来をひらく力があります。互いに英文学を専門にしながらも、幅広い教養を身につけたお二人が、さまざまな事例やみずからの体験を交えながら、苦難や困難を乗り越え、心に元気を与え、人間としての成長を促す言葉の数々をわかりやすく紹介しています。

また中山学長は、本学の創立者・廣池千九郎の格言「創業にも守成にも苦労して人を愛す」「一長に誇らず心を虚しくして短を補う」「途中困難最後必勝」なども取り上げています。

自からの「人間力」を高め、心豊かな人生を築いていくために、本書で「珠玉の言葉」に出会ってみませんか。

まえがき（渡部昇一）
第一章　箴言は現代人の心を癒す
第二章　自分に自信を持って生きる
第三章　こうすれば人間として成長できる
　　――自らの人間力を伸ばす道
第四章　こうすれば苦難や困難も乗り越えられる
第五章　未来をひらく
あとがき（中山　理）

編集後記

◆本号は「課外活動」を特集しました。

人間教育を建学の理念とする本学においては、学生時代をとおして様々な出会いを尊重します。大学での専門的な知識の修得は未知の世界との出会いであり、外国語の習得は異文化との出会いをとおして世界の動向に対する理解を深めます。また部活動やサークル活動をとおしてコーチや師範、さらに先輩や後輩との出会い、さらにはボランティア活動などによって実社会で活躍する人々との出会いがあります。

この出会いを求めるためには、第一歩を踏み出す勇気が必要です。本誌に収めた課外活動に取り組んだ学生の手記には、新たな世界に挑戦する時の葛藤と所期の目的を果たした達成感、多くの出会いから得た喜びと貴重な知恵が記されています。

また、本号には学生の課外活動を理解し、支援する教職員の手記を収めました。そこには師弟がともに学びあう姿があり、麗澤教育の成果を示しています。これはひとえにご多用中にもかかわらず、快くご執筆していただいた皆様の誠意の賜物ものです。ここに衷心より感謝申し上げます。

◆本誌によって多くの学生が、身近な事例をとおして麗澤教育の意義を知っていただき、さらにより多くの方に本学の人間教育の特色をご理解いただけるならば望外の幸せです。

出版委員会委員長　井出　元

出版委員会委員長　井出　元
委員（外国語学部）金丸良子・瀬川真由美・町　惠理子・森　勇俊
委員（経済学部）　佐久間裕秋・竹内啓二・立木教夫・花枝美恵子
委員　前川能教（企画部長）
事務局　今井　昇・齋藤亜希子・野木清司

『麗澤教育』第十八号

二〇一二年四月一日

編　集　出版委員会

発　行　麗　澤　大　学
〒二七七―八六八六
千葉県柏市光ヶ丘二―一―一
電話　〇四―七一七三―三〇三〇

印刷所　ベクトル印刷㈱

表紙　株式会社エヌ・ワイ・ピー